



Suzuki Hanako

鈴木 華子

総合心理学部 准教授

2005年ポストン大学文理学部心理学科卒業、2007年ポストンカレッジ大学院教育学研究科カウンセリング心理学専攻修士課程修了、熊本大学大学院医学教育部博士課程修了。博士(医学)。公認心理師、臨床心理士。2012年筑波大学人文社会系グローバルコモンズ機構(留学生相談室)助教、2017年より現職。専門はカウンセリング心理学、多文化カウンセリング。2008年日本小児科学会 Young Investigator Award受賞。International Union of Psychological Science理事、日本心理学会常務理事、アメリカ心理学会国際委員などを歴任。2023年に日本心理学会から発出された「心理学における多様性尊重のガイドライン」の作成では総括を務めた。

- 鈴木華子 (2023) 大学教員のワーク・ライフ・多様性を包摂する社会に向かって 伊藤正哉・山口慶子・榎原久直(編)心理職の仕事と私生活 若手のワーク・ライフ・バランスを考える(pp.68-78) 福村出版
- Suzuki, H. (2023). Multicultural Issues and Training in Counseling Education in Japan. Invited Presentation at the 2023 Annual Conference of the Asia-Pacific Association for Teacher Education. Taipei, Taiwan.
- Kanzaki, M. & Suzuki, H. (2023). School refusal as a representation of questioning normality: Understanding the richness of socio-cultural transitions. Culture and Psychology, 29(3), 644-659.
- Suzuki, H. & Kanzaki, M. (2022). Cultural translation of SEL to Japanese educational contexts: Teachers' perspectives on cultivating SEL competencies. In A. Smart & M. Sinclair (Eds.), NISSEM Global Briefs: Educating for the social, the emotional and the sustainable. Volume III: SEL in context. (pp. 50-63). NISSEM.
- Suzuki, H., Hasan, N. T., & Rundles, K. (2017). Prevention of academic, cultural and behavioral problems among international student populations. In M. Israelashvili & J. L. Romano (Eds.), Cambridge Handbook of International Prevention Science. (pp. 408-431). Cambridge University Press. NY.

関係性の中で生きる私たちのための多文化カウンセリング 宇宙に生きる時代により多くの方がより生きやすい社会を目指して

宇宙では、多様な社会的集団に属し多様な文化的背景を持つ人たちが共に生きることになります。私の研究する多文化カウンセリングは、全ての人が関係性の中で生きる上で、人権の尊重と社会的公正を前提とします。現在の地球には、優位性を持つ特権集団に属する人々と周縁化されやすい集団に属する人たちがいるという社会構造があり、国籍や性別、性的指向、年齢など様々な分けられた社会的カテゴリの中にある集団のどれに属するかによって抑圧や排除を受ける人たちが存在します (Goodman, 2011出口監訳2017)。私たちの研究グループは半構造化面接などの質的な調査法を用いて、異なる文化が交差する中で生きる人が経験する困難と健康でいる過程を明らかにし、宇宙に生きる時代に多様な人たちが暮らしやすい社会システム基盤の構築を目指しています。

様々な環境の交差がもたらす困難を知る

自身が慣れ親しんできたものとは異なる環境に身を置く留学生が、異文化への適応や母語以外の言語での学習に課題を抱えやすいことは先行研究から明らかになっていますが、彼らは現地の学生と比べて相談資源の利用が低い傾向があるとも言われています(堀他、2012など)。

留学生の精神的な不調を予防し健康を促進するため、7つの国と地域出身の大学院生10名に困難と乗り

越え方についての聞き取り調査を実施しました。その結果、ストレスを自身の糧と考える、体を動かすなど皆さんの工夫が見えた一方で、国籍や宗教由来する衣食の問題や日本人との交流の難しさなど、自らの努力だけでは解決し難い課題も浮かび上がりました。

この他にも、海外にルーツを持つ人、障がいを持つ人など様々な背景の方を対象にインタビュー調査を行っています。仕事で関わった人から支援資源に

ついて教わった、母国では難しいことが日本ではできたなど、人との関わりや環境の変化の中で困難が軽減されたケースがあった反面、外国人同士のコミュニティ内で差別的な態度を経験した、他の人と自身を比べてつらくなったなど周囲との関係性があるがゆえに悩む場合もあり、現在や自己に対する感覚は、環境や経験によって相対化されるものであることがみてとれました。

自分の持つ「特権」を自覚してよりよく使う

社会構造の中で特権集団に属する人は多くの場合、無自覚なままにマジョリティであるゆえの特権を持っています。私たち研究者も研究や教育、臨床の現場で自分が持つ特権を自覚しなければなりません。2024年3月、キューバのハバナ医科大学との間に学術交流協定を締結しました。共同研究に至った理由の一つが、これまでの心理学は欧米で展開された研究や発展してきた

概念が多く用いられ (Henrich, et al., 2010)、その土地ごとにある世界観や文化的価値観が必ずしも反映されていないという点です。「ウェルビーイング」という言葉一つをとっても、文化や文脈の中で意味するものが異なると思います。誰かから一方的に学ぶのではなく、知を循環させる協業体制をどう築くかが課題です。

宇宙開発についても同じことがいえます。きつ

と多くの宇宙ビジネスは「人類がよく生きるため」という前向きな発想から生まれるはずですが。関わる人それぞれが自分の持つ特権を自覚し、その力によって誰かを周縁化したかつての過ちを宇宙で繰り返さないよう公正を意識することで、宇宙がどんな背景を持つ人にとっても暮らしやすい、そして、そんな宇宙環境によって地球がより柔らかな世界になると期待しています。

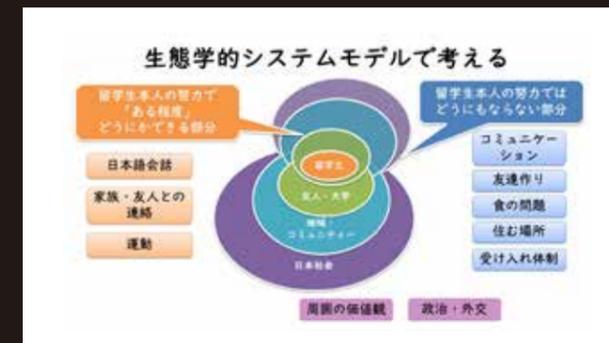


図1: 留学生の困難を生態学的システムモデルで考える



図2: 心理の研究にあたっては、自分自身の持つ『特権』に気づかなければならない